ぼうはん手帳

読売不動産株式会社
取締役
総務・コンプライアンス担当
岩崎　智彌
2001年から2010年まで読売新聞東京本社販売局販売企画調査部に勤務（2006年より同部部長）。Y防協の設立・運営に大きく貢献した。

10年という月日は、あっという間のようでもあり、とても長かったようにも感じます。この10年間で、何より大きく変化したのは、情報の受信・発信にかかわる日常生活の風景ではないかと思います。

携帯電話の主流はいわゆる「ガラケー」からスマートフォンに変わりました。さまざまなアプリケーションの利用によって、高度かつ多様な情報を一般市民が手作りできるようになりました。また情報発信のインフラも、個人ごとに分断されたブログから、拡散性の高いツイッターや重層的にネットワーク化されたフェイスブックなどに進化し、利用者は子どもからお年寄りまで、飛躍的に増加しています。

かつては編集・印刷・輸送能力を持つ新聞社や出版社、撮影・録音・電波発信能力を持つテレビ局やラジオ局といった、いわゆるマスコミだけが独占していた「情報発信」の営みを、個々の市民が自由に楽しみ始めたことは、社会の大きな進歩であると感じます。

しかし、コインに両面があるように、この進歩は、情報の氾濫と信頼低下という悪影響をも、私たちにもたらしました。「とくに根拠のない不安」のようなものが社会の底辺をひたひたと満たしつつあります。まるで自覚症状なく人の心身を蝕（むしば）む「ストレス」のようです。

この見えない暗雲の中、人々の生活を安心、安全、安定の航路へと導く「灯台の輝き」となることこそ、今日の新聞の使命であると確信します。環境激変の10年間に確固として変わらなかったのは、情報源としての新聞紙面への信頼感と、それを毎日確実にご家庭まで届ける戸別配達制度への信頼感です。

全国読売防犯協力会は、その信頼感を倍加するための尊い社会貢献であり、YCスタッフのモチベーションアップにもつながります。全国のYCの皆様が10年間、地域の防犯拠点としてたゆまぬ努力を続けてこられたことを、発足のお手伝いをした一人として心から誇りに思います。

編集後記

読売新聞東京本社
販売局販売企画調査部
部長 原田 康久

教科書でおなじみの童話『ごんぎつね』の作者新美南吉は、昨年が生誕100年だったことから再評価された感があります。『ごんぎつね』は切なく、味わい深い作品でしたが、新美の作品では『花のき村と盗人たち』という忘れがたい名作があります。

平和な村へやってきた盗人の親方。4人の弟子に村を内偵させ、自分は藪（やぶ）の陰でたばこをプカプカ。すると子牛を連れた一人の童が近づき、親方に子牛を預けると、遊びに行ってしまいます。ただそれだけのことなのに、今までさんざん人々から忌み嫌われてきた親方は清い心を取り戻し、弟子に盗人稼業をやめさせ、自分の悪事を役人にすっかり白状するのです。

相互理解をテーマに秀作を多く書いた新美らしい作品ですが、残念ながら現実社会では、この親方のように窃盗犯は簡単に改心してくれません。

2013年の『犯罪白書』によると、刑法犯の認知件数は、2002年をピークに減少し続けているというものの、100万件を超える数にのぼります。特に再犯者率が1997年から一貫して上昇し続けていると白書は警告しています。「改心」を促すのは、難しいことなのでしょう。

もっとも、10年におよぶ全国読売防犯協力会の活動が、少しは刑法犯減少のお役に立ったかもしれないと思うと、誇らしい気にもなります。やはり、犯罪を未然に防ぐこと、犯行を行いにくい町づくりをすることが重要になってくると思います。

町の隅々まで新聞販売店のスタッフは熟知し、巡回しています。人々の暮らしの中に分け入って商いを行う「御用聞き」の仕事を、全国規模で展開しているのはもはや新聞販売店だけではないでしょうか。個人主義、プライバシー重視ばかりはびこる世相で、奇跡的に残ったこのインフラを、防犯、さらには防災に役立てることが私たちの願いです。

盗賊の親方をすっかり改心させ、村を守った童の正体について、新美はこう結んでいます。「けっきょくわからなくて、ついには、こういうことにきまりました、――それは、土橋のたもとにむかしからある小さい地蔵さんだろう」。

我々も町と暮らしを優しく見守り、いざという時に人々を救う、このお地蔵さんのような存在でありたいと強く願います。